

保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.6

保育と子育ての ある暮らし



伊藤綾子



シリーズ「保育をつなぐ」お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信」第6回は、2年間の産休・育休から3歳児の学級担任に復帰した保育者が、幼稚園の保育と家庭の子育てに奮闘した1年を振り返りながら綴ります。

本園では幅広い年代の保育者が、それぞれの社会的立場を抱えながら保育に当たっています。社会のグローバル化が進む中、幼児期に多様な大人とのかかわりがあることは大切ですし、本教諭が時短勤務を希望することで、会議の効率化など、職場にとっても好影響が生じています。

また、昨年度から本園が取り組む研究のテーマは「幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園の教育課程の編成」で、入園前後の移行期の子どもの姿に目を向けようと考えています。こうした研究に際しても、今まさに0歳から2歳の子育てをしている本教諭のふとしたつづきや悩みが、他の保育者にとっては貴重な気付きのきっかけになっています。

伊藤綾子（いとう りょうこ）
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

*

昨年4月。2年間の産休・育休を経て、久しぶりに幼稚園に復帰しました。復帰する日が近づくとつれ、当時1歳11か月の息子と、6か月になる娘と3人でのんびり過ごしている毎日が変わってしまうことに、不安や寂しさが募っていました。子どもたちは別々の保育園に入所予定で、それぞれどんなふうに通うのだろうか。帰宅してご飯を作ってお風呂に入れて、毎日どうしたらいいのだろうか……。それでも、「生まれればなんとかなるよー」と周りに背中を押され、4月のスタートを切ったのでした。

それぞれの入園

4月2日。子どもたちを初めて保育園に預け、2年ぶりの出勤。ドキドキしながらも、二人ともなんとか過ごしてくれるのではと思っていました。職場の先生方に迎えてもらい、

帰ってきたんだなとうれしくなっていた矢先、保育園から電話がかかってきました。娘がミルクも離乳食も拒否！ そんなに意思の強いタイプだったのかとわが子に驚きながら、その日は何も仕事をせず帰らせてもらいました。そんなこんなで迎えた幼稚園の入園式。3歳の子どもたちとの初めての出会いに、緊張もありましたが、いよいよ始まるんだとワクワクしました。

保育初日。まだまだ訳もわからずやって来て、遊びだす子どもたちがいる一方で、お母さんと離れたくないと泣きたす子もいました。親子で一緒に遊ぶとますます離れ難くなるから、保護者には座って見えてもらうように声をかけようと、頭では思っていました。でも「ママがいい」と子どもが泣いていたら、お母さんだって不安で、寂しくて、立ち去り難いだろうなと思うと、なかなか声をかけられませんでした。

実はこの時、最初の1週間、意外にも泣かずに通園した息子が、朝ご飯や着替えの途中で保育園に行く雰囲気を感じると、「ちがう！ちがう！」と泣くようになっていました。保育園での別れ際にも大泣き。仕事がなければ、私も立ち去れなかっただろうな。そんな思いから、幼稚園の保護者に自分を重ね、その思いに寄り添い過ぎてしまったように思います。

学年で保育後に行った振り返りや、クラスの保護者会でも、そんな自分の状況を話しました。自分が保護者になって初めて味わう気持ちは、幼稚園の保護者と共有しながら過ごしていきたい。でもまずは、保護者としての自分は置いておいて、クラスの担任として子どもたちを受けとめ、一緒に楽しく過ごそうと、覚悟を決めました。

前と同じ職場。経験したことのある3歳児クラス。知っていることで、変わっていない感覚があり、どこか安心していました。でも、

自分の立場や気持ちは前とは違う。そのことを実感したこの時が、復帰した私の本当のスタートだったように思います。

園で食べるごはん

入園の日から、ミルクと離乳食を拒否した娘。家庭では私以外の人（夫や私の両親）からのミルクや離乳食も口にしていたので、保育園でも大丈夫だろうと、のんきに考えていました。実際は、初めての場所で、まだ知らない人である担任の先生からの食事を受け入れることは、娘にとって、とても難しいことだったようです。新しい生活を受け入れていないことの表れでもあったのかもしれませんが。それでも、だんだんと人や場所に慣れ、生活リズムもでき、食べる量が増えていきました。初めて連絡帳に「おかわり」と書かれていたときは、うれしくなりました。食べ物を取り入れるには、人や場所に対する安心感や、信

頼関係が大事であることを、あらためて感じました。

幼稚園でも、食べることに安心について、考えさせられることがありました。2学期が始まり、久しぶりの幼稚園で緊張しているのか、ずっとふくれっ面でいたA児とのことです。挨拶をしても、一緒に遊びたいと思っ近づいても、そっけない態度で、私もあまりかかわれずにいました。



その数日後のお弁当の時間。A児がお弁当を食べださず、じつとこちらを見ています。何だろうと思いついて「どうしたの？」と声をかけると、A児は「おなか痛い」と答えました。養護の先生に見てもらった

後、私の隣に座り、様子を見ることにしました。私と並んでみんなの方を向いて座っていたA児でしたが、しばらくすると、私と向かいあうように座り直しました。「ん？」と思いながらも、A児と、他に一緒に机を囲む子どもたちと、何気ないおしゃべりをしながらお弁当を食べていました。A児の表情が少し柔らかくなったと思った頃、「先生の隣で食べる！」と、A児が張り切った声で言いました。A児のお弁当を持ってくると、A児は恥ずかしさもあつてか、少しぶっきらぼうに「食べさせて」と言ってきました。隣で何度か食べさせるうちに、A児は自分で食べだし、完食すると、「(お弁当の片付けを)手伝って」と、また少しぶっきらぼうに伝えてきました。

一緒に遊びたい、やってほしい、甘えたい、そんな気持ちの表現は人それぞれです。照れ屋で、素直な気持ちをストレートには言葉にはしないA児の「おなか痛い」には、「もう少

し私と居てほしい」、そんな思いが込められていたのではないかと思いました。隣にいることで、手伝ってもらうことで、安心したように食べだしたA児の姿に、A児とどうかかわろうか迷っていた私は、二人の間にある緊張が少しほぐれたような感覚を味わいました。

甘えること・頼ること

入園からしばらくして泣くようになった息子でしたが、先生や友達の名前、教えてもらった歌などはあつという間に覚え、こちらが驚くほどでした。先生に親しみをもっていることが感じられ、その点は私も安心していました。それでも、もちろん緊張や不安はあり、担任の先生からはたびたび「頑張って過ごしていました」とお話がありました。あまり泣かず、給食も残さず、本人なりに気を張っていたのだと思います。環境に慣れるにつれ、息子は先生を試すようにいたずらをしてみた

り、食べたくないものはそう言ってみたりするようになりました。先生の背中にくっついて甘えてみたり、「やって」と頼んだりすることも増えていったようです。そんな息子の変化を、保育園の先生方はうれしく受けとめてくれていました。私も、幼稚園の子もたちが甘えたり、頼ったりしてくれるようになる、関係ができてきたよううれしくなります。でも、保護者の方からは「すみません」と言われることがあり、わが子のことになると「自分のことは自分で」「迷惑をかけないよ」と思ってしまう気持ちも共感できます。そんな折、幼稚園で「自立」について話すことがありました。一人で何でもできることよりも、「助けて」と言えることが大事なのではないか。やってみたらうれしさが、自分でやってみようという気持ちにつながる、という話でした。私自身、「困っている」「助けて」と言うことがあまり上手ではありません



が、復帰してあらためて、周りの人の支えなしでは生きていけないことを感じています。家事を手伝ってくれる家族。保育も家のことも気にかけてくださる幼稚園の先生方。困っていると助けてくれ、面白い遊びで楽しませてくれる大きい組の子どもたち。保育園の先生方にも、たくさんお世話になっています。人といると、思うようにいかないこともあり、そんな時、子どもは泣いたり、怒ったりして思いを表します。大人の私は子どもたちのよ

うに素直には思いを出しません、腹が立ったり、困ったりすることもあります。でも、頼ったり甘えたりできる人がいること、誰かとそういう関係になること、そして、自分も誰か

を助けたいと思うこと。そんな人とのつながりの中で暮らしていることを、いつも大事に思える人でありたいです。

復帰から1年

なかなかペースがつかめず、バタバタと過ぎてしまった復帰1年目。振り返ると、あらためて実感したこと、初めて知った気持ち、考え方が変わったと思うこともありました。この春は、わが子の「進級」に、なんだか不思議な気持ちになりました。心にも時間にも余裕のないことが多く、家庭と子育てと仕事の間で揺れる気持ちがないわけではありませんが、でも、やっぱり子どものパワーはすごい！落ち込んでも迷っても、また頑張ろうと元気になれるのは、子どもたちのおかげです。幼稚園でも家庭でも、子どもとの面白さをたくさん味わい、一緒に楽しみ、互いに支えあいながら暮らしていきたいと思えます。